二次元ぷち文庫

優等生は堕落しない

こんなのどうってことない……
ほ、ほんとなんだからっ！

木森山水道

表紙イラスト：舞猫ルル

試し読み版

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『優等生は堕落しない
こんなのどうってことない……ほ、ほんとなんだからっ！』
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

こんなのどうってことない……
ほ、ほんと
なんだからっ！
優等生は
堕落しない
木森山水道
表紙／舞猫ルル
二次元ぷち文庫

登場人物紹介

Characters

たかみね　きよみ
高峰 清美

高等部３年生の少女。性にけっぺきで、風紀委員も務める絵に描いたような優等生の『いい子』。

やすだ　はじめ
安田 一

清美の後輩で幼馴染。自堕落な性格。

夏の盛り。もうすぐ夏休みに入る頃の昼過ぎ。

「男子はどうして、こんな下劣な物を見たがるのかしら」

凛とした美声は嫌悪と怒気を孕んでおり、柳眉は逆立っている。呟き主である高峰清美は、私立虹源（にじげん）学園高等部三年生にして風紀委員の少女である。

彼女は敷地の外れにある焼却炉に向かっていた。馬鹿な男子達から取り上げた下らない物を放り込むために。

彼女が強く握り締めるそれは雑誌である。表紙では、二十代半ば程の美女が、あっは～んとばかりの視線を送っている。豊満で白いセクシーボディを、真紅のマイクロビキニで包んでいた。

清美としては、一目見ただけで同性として情けなくなる。夏休み前の開放感も、気持ちいいほど晴れ渡った夏空の爽快感も、どんよりとくもってしまう。

「うわぁ……よくこういうことができるわねぇ……」

いかがわしい雑誌をパラパラめくりながら呟く。『これも社会勉強よね……』というませた思春期少女のおためごかしは全く、塵ほどもない。その証拠に、露骨に顔をしかめている。

誌面には、女性だけが被写体になっている物だけでなく、男と卑猥に絡んでいる物もあった。

自分と同じ年頃の女子が、スクール水着じみた野暮ったい紺の競泳水着を着てビーチで微笑んでいる。モデル並に成熟した身体を持つ愛くるしい童顔少女だ。ただし、あどけなさが残る顔は酷く淫蕩だったが。

ペタンとお尻をついて座る彼女は、グンと反り返りながら伸びている男根に見下されている。肉棒は一本や二本ではない。どれもが先端からツーッと透明な液を出しており、熱砂に水溜りを作っている。

彼女の瞳の輝きは大好物を並べられた幼児のそれである。

隣のページでは淫らな顔も、水着を押し返す半球型の豊かな胸元も、肉付きのいい四肢も、閉じた太ももの間で盛り上がっている股間も濁り白に染められていた。

彼女を汚す白糸の粘り気は相当に強いらしく、男達の勃起と精液塗れの女体とがドス白いブリッジで繋がっていた。

「気持ち悪い」

不快のあまり口を真一文字に引き結ぶ彼女の目は、まるきり汚物を見る時のそれだった。

清美は性にけっぺきな少女だ。誠実な両親の影響でとても真面目な性格をしており、小等部の頃より教師からの受けもよい。誉めそやされるのは心地よいものだから、そのまま大人が夢想する『いい子』になった。

性格は外見にも反映されている。書道家が一筆入魂で引いたような柳眉。らんらんと輝

く気の強そうなネコ目。その上、尖った鼻と小さな口が絶妙な位置に配置されており、大理石の清浄さをほうふつとさせるキリッとした美貌となっている。

夏の雲と同じく真っ白いブラウスは、まるでおろしたてのようにパリッとしていた。襟には細紐のリボンがつけられているのだが、愛嬌よりもネクタイの堅苦しさを感じさせる。『風紀委員』のネームプレートがつけられた胸元は堂々とした円錐型。ブラウスの押され具合が甚だしく、限界までピンと伸びきっている。八十センチとも八十五センチとも囁かれている、学内屈指の巨乳だった。

小豆色を基調としたチェックのスカートからは、優等生らしく毎朝しているジョギングで作り上げられた若い上腿と、スラリと整った下腿が伸びているのだが、そんな両足は黒いニーソックスに包まれている。

「よいしょっと」

目的地である焼却炉の前に立つや、小窓ほどの大きさの重い石扉を手前に引っ張った。逞しい用務員には造作もない作業も細腕女子学生には一仕事だ。

扉が開いてくると、灰と炭が混じったツンとした刺激臭が鼻を突く。内部は真っ暗闇だが、陽光が差し込む入り口付近には、まだ燃えきっていないチョコレートの空箱や破かれたテストの答案などが見えた。

バスンッ！

汚らしい雑誌が勢いよく投げ捨てられた。紙の束が石壁に激突した鈍い音が周囲に響く。

「これでよしっ、と」

時間が来れば火が入れられ、放り込んだ物は灰となって見る影もなくなる。やるべきことをした達成感と、おぞましい物を消し去った充実感とでけっぺき風紀委員は晴れ晴れとしていた。

「あれ……？」

その一仕事を終えて校舎に帰る途中、優等生は奇妙な光景を目撃した。

後輩であり自堕落な幼馴染でもある安田一と、やはりチャラチャラしている高等部三年の池野山美樹（いけのやまみき）が歩いていた。

一は学園の夏服である、半そでのYシャツに制服のズボンという格好をしていた。シャツは第二ボタンまでが外されていて、見え隠れする胸元の上で金鎖のネックレスが揺れている。

性格の割には、身に付けている物はヨレていず、新品を買ってきたばかりという風だ。短くしている茶髪のサラサラ加減も手伝って清潔感が漂っている。いつもこんなものだから、十人前な顔の中肉中背不良男でもそれなりに見えてしまう。

「相変わらず、ふしだらなんだか清楚なんだか分からない格好をして……もう一人は、はしたないって断言できるけど」

美樹は柔和な小麦色肌の女子だった。星を撒いたように煌びやかなネイルアートを施した手で年下男子の腕に組み付き、甘えるようにしなだれかかっている。歩く振動でしきりに揺れる、腰まで届く長いソバージュ茶髪が彼の身体をくすぐっている。

気だるそうに垂れた目の縁には濃い黒のアイライン、まぶたにはブラウンのアイシャドウが、肌から滲み出たかのようなグラデーションで塗られている。メイクにそつはなく、目の白さが強調された端整な目元ができあがっている。

ブラウスは彼と同じく第二ボタンまでが開いており、乳房の合わせ目がチラついている。柔らかな谷間のすぐ上で、複数の金色ネックスレスが肌を擦っている。小豆色を基調にしたチェック柄の制服スカートも短く、お尻の膨らみと太ももの付け根がチラチラ見えている。若い足はルーズソックスだった。

二人は締まりのないニヤケ顔を突き合わせながら、被服室に消えていった。

そこは校舎の外れに位置しており、使用頻度が極端に少ない教室だ。当然、施錠されているのだが、何故か一は鍵を持っていて開錠していた。鍵は学園が管理しており、借りるには教員の許可が必要である。どう考えても、被服室とは無縁な彼が借りれるとは思えない。

「引っかかるわね……何か、変なことでもしようとしてるんじゃないかしら？」

思うや否や、清美の足は二人を追いかけていた。

今日は午前中で授業が終わったせいか、周囲に人の気配がまるでない。部活動をしてい

大声を張り上げて否定する様は、いやに力強い。だが、ハリボテと同じく芯のない軽さも孕んでいた。

「よく言えるぜ。みなよ」

下着ごとスカートをずり下ろす一。青い果実めいたウブな肉花びらが、間に入ってきた指をしゃぶっている光景が露になる。

遊び人のミキと違い、女優等生の肉花弁は薄く、ぴったりと閉じられている。それだけに、二枚の花びらが男の指へ食いついている風に見える。

しかも、結合部からは愛液が染み出している。男子の指を伝い腕までを汚し、あるいは清美自身の肌の上を垂れて豊満なお尻までも湿らせている。

「涎垂らして食い締めて……マ〇コどころか尻まで濡れ濡れじゃん。これって、女が感じてなきゃ見れないもんだぜ？」

「違うって言ったら違うのっ！」

一の言うことは正しい。彼は女の生理を指摘したのだ。けれど、だからこそ肯定できない。彼の台詞は、自分が『丸裸』になったことを示しているのに等しいからだ。

こんな男に、ナマの自分を見せたくなどない。その貞操観念が反抗の言葉を紡がせる。もしも、心を許した恋人が相手だったのなら素直に頷いていたかも知れないが。

「強情だな、ねーちゃんは」

えっちシーン試し読み スタート!

指を引き抜き、しつこくまとわりついてきた粘液の糸を指を乱暴に振って振り払うと、自分のズボンと下着を下ろした。

「今からこいつをブチこむぜぇ。粘膜同士を擦り合わせれば流石に認めてくれるよな？」

剥き出しの腰を、黒いニーソックスだけになった下半身に密着させる。お尻の谷間に肉棒がはまった。触れただけで火傷しそうな高温を宿しており、しかも長く太く硬い。見ていた時も驚嘆したが、自分の柔肌で感じさせられると、その存在感は別物だ。

（私のアソコに挿入するというの……！）

好きでもないどころか、嫌いでしかない男子に貞操を奪われるなど冗談ではない。よりにもよって、あんなに黒ずんで、ビキビキの、おぞましい性器になど。

「いやっ、絶対にいやぁっ!!!」

自分がどうしてこうされているのかも忘れ、じたばた暴れる。けれども。

「おっと、ムダムダ。逃がすもんかよ。承諾したんだ、最後まで付き合ってもらうぜ」

力づくで押さえ込む。その傍ら、尻タブをなぞりながら肉穴に向けてペニスを移動させる。

「挿入させるもんですかっ」

清美は抵抗するつもりで、太ももをぴったりと閉じた。しかし。

「ムダだって」

灼熱の勃起が、閉じられた太ももの谷間に押し入ってくる。通常であれば亀頭がめり込

んでそこまでだったろう。だが、今は違う。
「くっ……んぬっ……だめ、止まらない……いやぁ……腰が進んでくる……腰を進めるな……ぁ」
滴らせられた愛液が潤滑油の働きをし、醜い性器の進行を助けていた。自分の熱を肌にすり込みながら、牡棒は太ももの間に割り込んでくる。
「うはっ、ねーちゃんが締めてくれるお陰で、すげぇ気持ちいい。これって素股って言うんだぜ、プレイの一種で、風俗とかでもやってくれるやつだ」
「風俗ですって……！」
意図的にしたことではないものの、自分が商売女と同じことをしていたといわれてがく然とするけっぺき優等生。その時、力が緩んだ。
ヌルンッ！
「きゃっ……や……入ってる……熱いのが女性器の中に……気持ち悪い……っ！」
股の間に位置する性器に、亀頭の先端が埋まっている。嫌だと思っていても、はまり込んだ男性器の先端から、興奮する男の熱が膣内に向けて伝わってくる。
性器の感触と熱の伝播のせいか、内部に甘い痛みが生まれだす。疼きといってもいい。それが掻痒欲を湧き上がらせる。指でしたみたいに擦って欲しい。そうするのに都合がいいものが密着しているのだし。しかも、より太くて長い物が。

（なっ、違う！　こんなの本心じゃない‼）

必死に否定しても、秘所に蓄積していく欲求は霧散しない。

「好都合な下つきだから、このままバックで処女膜をブチやぶってやるよ……へへへ、まさかねーちゃんの膜をいただける日が来るとはなぁ」

清美のなで肩をガッシリ抱き締め、尻をゆっくり前に突き出す。

「やだっ、入れないで！」

清美はまた暴れた。先ほどよりも強硬だった。だが、一はそれも押さえつけた。

「ぁあ……圧迫されてる……私の中が……あんなものに……！」

その一方で、彼はヌルつく膣内の壁と熱交換をしながら、膨らみきった亀頭を、少しずつ奥へ進ませていた。

「無理っ、入らない、こんなの私に入るわけないっ！」

肉で作られているものだというのに、鉄棒か何かをねじ込まれている心地だ。身体が裂けて壊れてしまうと思える痛苦が襲いくる。

しかし、一は取り合わない。鏡の中に映る彼の顔はニヤけている。しゅう態を晒せば晒すほど喜んでいる。

「おっ、ここが膜か」

呟くと、腰を止めた。少し引く。

「え、膜って……膜ってまさか！」
聞き捨てならない言葉に、痛みでぼやけていた心が覚醒した。錯覚か、一の肉棒に力がみなぎっていっている。
清美が更に何かを言う前に、一が吼えた。
「おらぁっ！」
肉の槍先が、立ちはだかる物を破るのに必要な距離だけを早く、重く、強く駆け抜け――貫通した。
ブツッ……ツーッ……。
「かはっ……ぁ……あ……」
爪先から頭の天辺までを貫く鮮烈な痛み。一生に一度の痛みが全身を舞台に暴発した。
挿入初期の掻痒欲は消えてなくなっている。今あるのは痛苦。身体と心の。
（こんな惨めな処女喪失って……あんまりよ……）
相手もシチュエーションも最悪だ。清美の端麗な顔がくしゃりと歪んでいる。
「ぐへへへっ、処女膜ごちそうさん。いい破り心地だったぜ。お礼にたっぷり女の喜びを教えてやるからな、清美」
対する一は気色を浮かべている。最低の処女喪失から立ち直れない清美に構わない。呼び捨てで名を呼び、腰を振り始めた。

「おおっ、流石は処女マン。最高の締まりだぜ」
肉の抜き差しを続けながら両手の手の平を広げ、手の平からはみ出す乳房を握り締める。ぎゅっ、ぎゅっと揉みしだきながら、人差し指で乳首を弄る。乳頭は初期の倍以上の高さ、太さに膨れ上がっていた。
「そらっ、そらっ」
指の腹で勃起乳頭を倒し、転がし、胸の中へと押し潰す。刻一刻と力加減を変え、どれを繰り返すにしても同じ強さでは決してしない。
「あ……あっ、んあぁっ……」
（どうして……痛みが消えて……身体が……）
胸が興奮のピンク色に赤熱し、ぷっくり膨れた尖肉の感度が増していく。指の赤い跡がつくほど握られると、心地よく息が詰まってしまう。同時に先端をなぶられると、胸全体に濃厚な痺れが行き渡る。意識がそちらに奪われて、苦痛が気にならなくなる。
「感じてるから痛くなくなってるんだよ。ねーちゃんは、俺とのセックスで感じてるんだよ。認めろよ、清美」
鏡に映る結合部から、破瓜の血と愛液の混合汁がポタッ、ポタッと垂れている。処女膜が破られた揺ぎない証左であるのだが、幼馴染に乱れさせられている今では現実感が薄らいでいる。

「しょうがねぇよ。俺は何人も女をくってる。お前を感じさせることなんて赤子の手をひねるようなもんさ。だから仕方ねーんだ。認めて楽しんだ方が楽だぜ、なぁ」

いやに優しい声音で囁いてくる。うなじをネットリ舐め上げて、かと思うと唾液たっぷりの唇で耳たぶを甘く噛み、更には耳の穴奥深くへ向けてふぅっと熱い息を吹きかける。

「ぁ……あぅぅぅっ……」

胸と同じく、頭の中まで痺れてくる。頭を満たす甘い痺れのせいで、まるで正常な感覚までもが麻痺したかのようだ。膣内で繰り広げられている性器同士の擦り合いがいよいよ甘ったるく――気持ちよくなってきた。

（やだっ、さっきは本当に痛かったのに……惨めで惨めで仕方なかったのに……どうしてこんな……気持ちいいのよぉ……）

性行為になじんできた肉体は思考を鈍らせ、その一方で心と身体の肉悦連鎖が強固なものになっていく。霧散していく意識の代わりに顔を出すのは、肉悦を肯定しようという気持ちと、性の快感への欲求だった。自分の前に喘がされていた不良娘の痴態が頭の中で鮮明に再生される。

「んふぅ……ち、違うぅっ……あンッ……私はあんなバカ女とは違うの……感じてなんか……くぅっっ……ない……！」

口走るが、彼女のネコ目はぼんやりしている。頬は色濃く紅潮し、額にはうっすらと汗

が浮かんでおり、艶やかな髪の何本かが貼りついている。
「あっ、くっ、感じてないっ……あんぁ……絶対に気持ちいいなんて思ってない……こんなの気持ち悪い……のぉっ……」
弱弱しく髪を振り乱す女風紀委員。その股間からは多量の愛液が垂れている。牡棒が引き抜かれる度に、逞しく張った亀頭のカリにかきだされているのだが、その量はかのチャラ女と比較してもそん色ない。牝汁の生々しい匂いが、二人を包み込んでいる。
「へっ、ならこれでどうだ」
一は繋がったまま、身に着いていた他の衣服を全て脱ぎ捨てて全裸になる。露になった肉体は逞しかった。腕は筋肉質に盛り上がっており、腹筋も綺麗に割れている。美樹と同じく日焼けしていないことが、却って野性味を感じさせる。
自堕落なだけに、弛んだ身体に違いないと決め付けていた幼馴染女子が目を剥いた。と、腋の下から腕を通して清美をガッシリと羽交い絞めにする一。彼女の身体に、しなやかだが硬い牡筋肉の存在感がのりかかる。彼が首から下げる金鎖が背中に食い込む、軽いチクチク感もあった。
パンッ！　パンッ！　パンッッッ！
腰振りが加速した。彼の下腹と清美のお尻が何度もぶつかり、軽くて甲高い音が教室の空気を震わせている。粘着質な水音も加わり、牡と牝が交わる事実を彼女の頭へ強く伝え

てくる。強固だったタガが緩んでいく。
「あふぅあッ！　はげしぃっ！　わ、私セックスしてる……風紀委員なのに、学園で、男子と……んアァッ！」
男子の腰ふりに合わせて、ロケットめいた円錐型の巨乳――キスマークのように赤い手跡がついている――がぶるんぶるん弾み、黒いニーソックスだけの下半身がガクガク揺さぶられる。鏡に映る全身は、どこもかしこも茹で上がっており、噴き出す汗が、男を知った女体をツヤツヤさせている。
「そうだ、セックスしてるんだ……学園の、教室でな……そんでついでに、中出しされるんだ……デカパイとかを責めて快感で芯まであぶった身体の……元処女のぐじゅぐじゅマ○コに、チャラ男の熱いどろどろザーメンをたっぷり注がれるんだよ……！」
清美の目が、ハッとしたように見開かれた。
「そんなっ、学園でセックスなんてだけで非常識なのに……んンッ……許されないわ……妊娠しちゃうっ、んあッ！」
更に続けようとしたが、一が両乳房を鷲掴みして強烈に握ったことで中断させられた。前戯として乳悦を教え込まれていたせいで、手荒い所作にも乳悦を感じさせられてしまう上に、指し抜き快感との相乗効果が発現し、快感のあまり言葉を紡げなくなってしまった。
「孕ませてやるぜ……晴れて俺の女にしてやるよ……俺とのガキを詰めたボテ腹を他の連

中に見せつけてやろうぜ」

不意に、学園の制服に身を包んだ臨月の自分の姿が思い浮かんだ。清潔なブラウスには『風紀委員』のネームプレートがつけられている。未成年であり、社会的に独立していない学生であるというのに妊娠した自分を、大勢の男子が見つめている。

「大きくなったお腹を見せるなんていやっ、それが、よりによってあんたとの子供だなんて絶対にいやぁっ、だめっ、やめな――いやっ、アァッ――――――!!!」

膣内を我が物顔で行き来していた肉棒が深々と突き刺さった。膨れ上がった亀頭が子宮口にめり込み、女肉に包まれる中で最後の脈動を果たした。

「おらぁッ！　これが妊娠の素の精液だぜ、思い切り注いでやるよ!!!」

ドビュビュビュビュッ！　ビュルンッ！　ドビュンッ、ドビュンッ！

「んアァァァァッッッッッ!!!　精液出てるっ、熱くてドロドロぉっ！　赤ちゃんできちゃう、いや、抜いて、抜いてぇ、男性器を抜いてよぉ!!」

膣内に広がる、身の毛のよだつ熱い感触。ザーメンの濃さも明確に分かる。無垢だった子宮口や膣壁のそこかしこにベットリと貼りついて、体内に染み込んでいる。子作りセックスをする女性が体験するのと同じ体験だが、清美は子供を望んでいない。

「いやっ、妊娠しちゃう！　いやっ、いやぁッ!!」

おののく女子が身体をばたつかせる。けれどもやはり、一は振り解けない。

「せ、先輩……高峰先輩っ……！」

年下男子はされるがままだ。熱く濡れた膣肉によって全方位から肉棒を圧迫されてよほど気持ちいいのか、さっそく目がうつろになっている。力なく開く口が、童貞をもらってくれた女先輩の名前を呼ぶ。口の端から涎を漏らしながら。

（こんなにだらしなく、格好の悪い声だして……でも……これは私が出させてるのね……）

彼の反応は、学生間セックスなどというイケナイことをしていることを強く意識させ、禁忌を破るマゾヒスティックな愉悦を感じさせる。それが心地よくて、どんどん腰を弾ませる。

「はふぅあ……どう、気持ちいい？　私、気持ちよくしてあげられてる……？」

「え、えぇ……とっても……くぅっ、締まってぐちょぐちょって……あぁ……」

ゾクゾクゾクゾクゥッ！

（私いま、悪いことしてる……合意の上だけれど、こんな保健室なんかで年下男子の大切な初めてを奪って……なのに……）

身体が燃え上がってしまう。男の視線を釘付けにした乳首は切なそうに震え、その根本に広がる乳輪も乳房も興奮で膨張している。身体に至っては、興奮の赤みが差している。

読み放題（一部）
えっ試し読み
ストーリー！

憧れの女性に淫らなことをしてもらえる権利を最初に得た男子を、他の三人は血走った目で凝視している。股間では、性欲の塊肉がはちきれんばかりだ。

視界の端に映るその光景が、女優等生の被虐感を大きくさせる。清美は、タブーを破る魔悦の味を占めつつあった。

「あぁ、気持ちいい……でも、もう出る……射精しちゃう……先輩、このまま中でいいですか……最後まで、先輩のおま○こに包まれていたい……うぅっ……」

大人に近い歳だというのに、母親へ抱擁を求める幼子と同じ表情で、男子は膣内射精をねだってくる。

それに堅物優等生は、

「あふっ……い、いいわよ……ん……このまま出したいなら出して……」

優しい声で肯定する。頼られる弱み、刺激される母性本能、そして親に保護されている未成年者が子作りめいたことをする背徳感。

妊娠するかも知れない現実さえも、背悦にくべられる薪でしかない。ふと、子供を宿してお腹が膨れた自分の姿が頭の中に浮かんだ。

「出して、私の中に好きなだけ……初めての膣内射精を楽しんでっ」

粘っこい汁と共に放たれる数億の精子。その全てがたった一つの卵子に殺到する。無意識に想像する清美。

昨日、似たような想像をした時はおののいたというのに、今は恍惚としている

（イケナイのに……でも……）

汗ばんだ手の平を更にぎゅっと握りこんだ。男子も手の平を握り返してくる。

淫欲を解消しあう恋人のように、子作りに励む夫婦のように、仲睦まじく、上半身裸で下半身はチェックの制服スカートに黒いニーソックスという破廉恥な格好で、清美は腰を振りたくる。

「あ、あ、出るっ、先輩の中に出させてもらいますっ、先輩に中出しますっ!!」

お尻をついた瞬間、擦り上げられた亀頭がグワッと膨らんだ。

「あンッ、出して出して、好きなだけ出して!!」

言葉通り、思う存分射精させようとするかのように、可愛い童貞の牡汁を搾りつくそうとしているかのように、勃起を抱擁する膣内がキュッと収縮した。

ドクッ！　ドクン！　ドクンッ！

「あぁぁぁッッッッ！」

鈴口から子宮口めがけて噴出する体液は、勢いは噴水で質はマグマ。物足りなさを感じた最奥をしたたかに打ち、粘っこいとはいえ液体の性質を利用して肉壁の隙間に染み入っていく。

その感覚に、女子優等生の半裸がわなないた。背中が強張り、射精を受ける衝撃に目が

ぎゅっと閉ざされる。結合部からは多量の愛液が漏れ出しており、交じり合っている粘度が強い白濁もトロトロになっている。

「あ……私の中が叩かれて……精液が広がっていく……」

ほうっと息を吐きながら、満足気に呟いた。

相手が嫌悪感よりも好意の方が大きい子、激しいが穏やかでもある性行為。衝撃的な初体験の時は、一方的にされているという感じであったが今は違う。

「ん……」

相手が呆けた顔で射精快感を噛み締めているのをいいことに、清美もお尻をぺたんとつき、リラックスして射精を受ける感触を感じている。

（はぁ……こうして精液を受け止めてると、ほわぁ～ってしてくる……処女でなくなったばかりなのに、こんな気持ちになれるものなの……？）

落ち着いて受ける膣内射精は奇妙な満足感を与えてくる。肉棒がはまり込んで感じるのとはまた違った濃厚さだ。火照った身体がぐずぐずに蕩けていくような、頭をぼうっとさせるような。自身の存在感を快感と共に薄ませる。

快感への順応を示すかのように、短小肉棒で悦びを享受した膣内が再びきゅーっと締まった。

「あっ……あぁっ！」

ビュッ！　ビュンッ！

粘液の弾がまた撃ちだされた。今度の射精は、量こそ少なかったが粘り気はまだある。一番奥や膣内に付着する一瞬も、付いた後にねば～っと落ちていく様子も明確にわかる。

「はぅ……ぅん……んっ……」

若い女体がまた震えた。彼女はうっとりと目を細め、はふうっと息をつく。

「気持ちよさそうだな、清美」

一からかけられた突然の言葉。ぎょっとして我に返る清美。

「べ、別に――」

お決まりの言葉を言いかけて止める。眼下で至福の表情を浮かべている男子に水を差すような気がしたからだ。せっかく、いい気持ちで童貞喪失ができたのに、台無しにしたのでは可愛そう。

彼の言葉を無視し、次の相手を選ぼうと視線を巡らせる。その時になってようやく気づいた。いつの間にか彼女は他の三人によって包囲されていた。

「もう我慢できない、先輩、次はぜひ俺を！」

「こっちを頼みます、後生ですからっ」

「オレのここを見てください、こんなに先輩を求めてるんです！」

誰の鼻息も荒い。言葉通り、もう我慢できないとばかりに勃起を突きつけてくる。

「ちょっ、ちょっと待って、私は逃げないから、ね？　ね？　少し落ち着いて」
なだめようとするが、獣じみた迫力で迫る彼らは止まらない。揉みくちゃにされてしまいそうだ。
危機感を覚えた清美は、中でも一番こらえ性がなさそうな男子の胸板をそっと押し倒して手早く跨った。
他の二人は、両手で相手をすることにする。昨日、一は一方的に責めてきたので、手で奉仕するなどしたことはないが、昨日見た雑誌にあった内容を思い出し、見よう見まねでやってみる。
「あっ、あぁ～～～～おっきい……んっ、んんっ、熱い……硬い……」
騎乗位にかける彼の男根は、一番太くて長かったが、彼女はもうためらわなかった。最初に相手をした男子の精液が垂れるのも構わず、ごく自然に根本までくわえこむ。受け入れた後は、勃起と自分の膣肉をなじませるように、前後にゆっくりと腰を振り出した。
握りつぶさないように注意しつつ、両手の肉棒をなだめさせるのには大変な注意が必要だったが、運動能力が高い優等生は持ち前のバランス感覚を発揮して、ほどなくして順応を果たした。
「はぁ……先輩、もっと強くおま○こで擦ってくれませんか……もっと激しくして欲しいです……！」

「わ、分かったわ」

太ももで腰を挟み、抉るつもりで、花弁を勃起のふもとに強く擦りつける。何度も何度も連続して。

狭まった膣奥の肉が、初めて女を知る亀頭のツルツルの表面を満遍なく刺激する。男子は気持ちよさそうに喘いだが、清美も鼻を鳴らしている。

「っう……根本まですっかり下りていいですか……裏側の筋を強く擦ってくださいっ」

「こうでいい……かしら」

しなやかな指に力を込め、肉棒をすっかり包み込む。そうして、裏側に位置する一際弾力ある箇所を慎重に撫でる。

相手の顔を熟視しつつ、痛みを与えまいと注意しながら、満足させてやるべく手首をスライドさせる。弱く強く、遅く早く、試行錯誤しながら一生懸命に奉仕する。

男子達は荒い呼吸を繰り返しながら、自分の欲望を吐露する。清美は従順に期待に応えた。頼られる嬉しさや、背徳の快感、それに肉の甘美といったものだけでなく、逞しい牡に囲まれる牝の喜悦も相まって、女風紀委員の挙措に熱がこもる。

興奮する男女から熱気が立ち上り、密集しているが故に肌へまとわりついてくる。男の味を知り始めた肉穴と、男を知らなかった手で肉奉仕する風紀委員の体温は上昇する一方だ。

ふと、打ち捨てられた自分のブラウスが視界に入った。そこには、風紀委員と書かれたネームプレートが。

（あぁ……そうよ、私は風紀委員なのに……保健室で……学園でこんなことして……でも、頭がぼうっとして……いやじゃないって思い始めて……）

自身の立場を思い出すと、自分の非常識さが身に染みる。秩序を守るべき立場にあるというのに、セックスなどは汚らしい行為だと考えていたのに、それを反故にする行動をとっている。自分の清潔さの具現ともいえる物を目にしても、彼女はやめられない。

「先輩、もう少し強く扱いてください……根元からカリの部分までを強く……亀頭にも手の平の縁でちょっと触ってください……あぁっ、それそれ、上手ですっ」

リクエストに応えてその通りにしてやると、握る肉棒が嬉しそうに跳ねた。喜ばせている実感も、そうして褒められるのも心地よい。

「はぁっ……」

求められて嬉しがられる。そして自分も嬉しい。頼られたい『優等生』として喜ばしい。

「気持ちよくなって……身体を使って手伝うから……」

真面目な女優等生のしおらしい態度に、肉棒達が歓声を上げた。手で、膣内でググっと膨れ上がっていく。

握る勃起からは透明な汁が漏れ出している。無垢だった手の平に男汁が染み込み、手が

肉棒を往復する度にニチャニチャという卑猥な音色が響き渡る。
膣にしろ、興奮が高まって更に膨れた亀頭の先端が子宮口に届き始めたのだが、そこから熱い汁が吐き出されている。精液ほどの粘りがないので、恐らくは手に出されているのと同じ、カウパーなのだろう。
「もう……出るぅ！　先輩、このまま中に出させてぇっ！」
「んっ……いいわよ……たくさん出して、気持ちよくなってね……あんっ……あなたた達も、好きな時に、ね……」
ニッコリ微笑み、腰を弾ませる。はしたない水音と肉同士がぶつかり合う音が高くなっても頓着しない。むしろ、後輩達の求めに応じ、イケナイことをしている現実を実感させられて気分がいいくらいだ。
「さぁ出して、みんな、出してっ!!!」
痴女じみた所作で男の射精を促す堅物優等生。腰を振る勢いに従い、身体に浮いた汗が飛び散り、ロケット型の巨乳がふるんふるん震え、艶やかな髪が宙空で踊っている。
男女の息遣いと、身体から放出される熱量が肉のひしめく空間を満たす。蒸発した汗にのった体臭が、他人のそれと混ざり合い、各々の肌にネットリと絡みつく。
そんな中で、肉棒の脈動が最高潮に達し――。
「「先輩っ!!!」」

三人が射精。タイプの異なる初々しい勃起が、膣内と体外で同時に爆ぜた。

膣内では、肉ヒダの隙間にしつこくこびりついていた最初の精液に、新しく出された粘液が覆いかぶさっていく。古い汁に塗れた膣の上書きは、清美の総身を波立たせた。

「ドクドク出てる……私の中に……」

（精液のドロドロした感じだけじゃなく、この子の身体の熱も私の中に染み込んできて……あぁ、この感じ……いい……かも……）

手で献身していた牡棒の精液は乳房に飛んできた。白濁は酷く粘っこく、むせ返るほどの生臭さ。立体的なだ円形の形をとってべったりとくっつき、胸全体を精液の匂いで覆っている。

プリンプリンの未成年おっぱいが、年下学生の童貞精液の受け皿と化し、まだら模様をつけられている。充血した乳首を狙撃された時などは、射精を受けている膣がギュンと収縮した。

「んあぁぁぁ……このにおい……すごくキツイ……でも……」

嗅いでいると何故だか身体の芯がカァッと熱くなってくる。意識が遥か高みにいってしまったかのような今では尚更そうだ。不快臭である筈なのに、拒絶しにくい魅力を感じてしまう。

（気持ちいい……いやらしいことをしてるのに、こんな気持ちになるなんて……）

「だ、だめ……そんなの入らない……」

手で口を塞いだまま、誰にともなく呟く。それは、受け入れ経験のある勃起の中では最高の雄々しさを誇っていた。暫定一位であった一のものと比べて、長さも太さも一割ほどは上回っている。

ゴクリ……。

目を剥く清美の喉がうごめいた。

（こんなに長くて太いものが私の中に入る訳ない……処女でなくなったばかりで、一のヤツもキツキツとかいってたアソコなのに……私のアソコが壊れちゃう……）

自分の中に入らないという言葉は、本当にそう思ってのことだ。しかし。

（でも……こんなのが入ったら、きっとアソコがペニスで隙間なくみっちり埋められて……傘みたいに外側へ張り出した部分が中のお肉をゴスゴス擦って……）

淫らな想像もしてしまう。心には入れて欲しいという願望もあるのだ。本気になれば暴れられるのにそれをせず、鼓動がいよいようるさくなっているのはその表れであろう。

男性達の視線も熱い。八十八センチEカップと告白させられた胸。先端は膨らみきって尖っており、その上男達の唾液で濡れている。スカートが捲くり上げられて露になった股間では、肉花弁がパクパクと開閉を繰り返していた。こちらも逞しい男性の唾液に塗れている。それらに男達の視線が突き刺さる。

ここから試し読みスタート！

「はぁ、はぁ、はぁ、はぁ……」

息苦しさは一向にやまない。呼吸を元に戻すことにではなく、今まさに合体しようとしている部分を見つめることに意識が集中しているのでは当たり前かも知れないが。

ジュブリッッッ！

無意識の内に、口を塞いでいた手が緩んだ。

（入ってくる……あぁ、すごい……こんなにすごいだなんて……！）

熱く重く、存在感が満ちた肉の塊が股間の中に割り込んでくる。正上位で繋がった男は勃起に体重をかけてどんどん食い込ませる。彼の唾液と愛液の混合液が、鍛え上げられた牡の下腹に飛び散っている。

「ぁあっ……こん……っ……こんなの初めて……」

剛棒は、まだ狭い膣内を自分の形に押し広げながら進んでくる。痛みはない。女性器が壊れてしまうという危惧はどうやら杞憂だったらしい。

しかし、想像は実現していた。今まで感じたことがない圧倒的な質感と量感が膣内を満たしていく。嬉しそうにしながら目一杯、大口を開けた大陰唇を見るまでもなく、逞しすぎる勃起ペニスが内部をギチギチに満たしていることが伝わってくる。

「あはぁっ……ンッ……すっ……ごい……」

こんな太くて硬くて長いものと合体したのであれば、もう膣の形は戻らないのではない

だろうか。保健室でのことが思い出される。今思えば、一のものに劣る肉棒では精神的な充足を味わえても、肉体的には物足りなかった。

この瞬間に肉棒から伝わってくる甚だしい体温も、肉の硬さも、これまで味わったことのない水準だ。まさに牡というのにふさわしい。

（挿入されているだけなのに、頭の中が真っ白になっていく……ぼうってして、もっと激しくして欲しい、早くズンズン突いて欲しいって思えてくる……はぁ……あぁ、早く……）

入れられただけでこう思わされるのであれば、このままでは、この男性以外とセックスをしても満足できなくなるのではないだろうか。

男女の肉交を嫌悪していたけっぺき優等生は、望まない性経験を重ねた結果か、そんな心配をしてしまうようになっていた。

「おじさんのは何番目くらいにいいって思う？」

まだ若いのに、筋肉質の男性はおじさんと自称して聞いてきた。腰を揺すりながら。潤んだ膣肉の谷間が、グッと外に張り出した亀頭冠で何度も引っかかれる。

「うっ……あぁあぁッ！」

密着した状態で、性感を知る肉の皺が伸び縮みさせられる。腰が動く度に、鮮烈な快感が頭を突き抜ける。

「どうかなぁ？」

グリッ……グリッ……グリッ……。

間の抜けた語りかけの反面、返答を迫る肉棒の威力は暴力的だ。

（また私を馬鹿にしてる……快感に負けて、はしたないことを言うのは恥ずかしいって……それは分かるのに……っ）

グリッ！　グリッッ!!　グリィッッッ!!!

淫らな告白をせかすかのように、打ち込まれる強さがいや増していく。口元を塞いでいた手がすっかり力を失い、突かれる振動で頭の両脇に追いやられた。押し寄せてくる快感の衝撃が、清美の心までもを大きく揺さぶり、遂には抵抗心を瓦解させる。

「アァー！　ぁあ……い、一番です……こんなすごいおちんちんは初めてです……あっ、擦られる……ぁ……ぁあ……あぁッッッ、お、奥まで来てるぅ!!」

短期で重ねた性経験で淫らになり始めた身体の影響と、それを事前にほぐされていたせいで、流石の堅物女子も上質な男根の性能に心奪われてしまう。

「それは光栄だね。でも、何人中で一番なのかな？」

にんまりする男。肉棒で秘密を引き出した征服感からか、更に張り詰めた亀頭の先端で子宮口をツンツン叩きながら畳み掛けてくる。膨らみの増した肉傘が、膣奥付近の肉凸凹を一層深く擦り上げる。

「ろ、六人ですっ、六人の中で一番、んあぁッ！」
頑なに黙秘していたことも、上質勃起の動き一つであっけなく暴露させられてしまう。
（あぁ……私はなんてことを……）
肉棒に与えられる快感に負けて、自分は淫乱です、と叫んでしまった。
「ふふ、清純そうな顔をしているのに、結構経験してるんだね。いやらしい子だ」
自分の形に広がった膣を満遍なく擦り、自分の形に固定してやるとでも言わんばかりに、ねちっこく腰を使ってくる。規格外れの肉棒と鍛え上げられた筋肉が繰り出す一撃一撃は、きっと忘れたくても忘れられないだろう。
「いやらしいなんて言わないでっ、私はいやらしくないっ、いやらしくないのっ、仕方なかったのぉ」
いやいやと顔を振る清美。だが、やはりろくな抵抗はしない。
牡の威力を教え込まされる抜き差しの快感。肉体美は努力の賜物であるとして、そこに好感を持つ清美の性格が彼女を耽溺させている。不真面目者は例外とする心情も、圧倒的な肉悦で吹き飛んでいる。
「だから、こんなの気持ちよくないっ、気持ちよくなんて――んンンンッ！」
トロンと緩んだつぶらな瞳から法悦の涙を流し、唇の端から唾液の筋を垂らしている蕩け顔で繰り返す。

快感を感じていないと表明すれば『優等生の風紀委員』という立場は守れる筈だと、そう思い。長年かけて積み上げてきた魂は今も高峰清美にこびりついているのだ。

「そうかい。悔しいなぁ」

全く悔しそうでない顔で彼は呟いた。と、瞳がギラッと光る。

「なら、これでどうだい。おじさんの精液はとても濃くてね。今日はまだ出していないからきっとドロッドロだ。そういうのを膣内の奥深くで射精すると、女の人はとても喜んでくれる。妊娠するかも知れないけど、病み付きになってしまったと言ってくれるんだ」

一拍おき、清美の瞳を覗き込み。

「お嬢さんはどうかな」

ズクンッ！

身体の性感帯が一斉に跳ねた。歓喜の叫びを上げたといってもいい。

（ち……膣内射精……膣の中で精液を出される……ドロドロの汁がナカに……）

一やあの四人に膣内射精された記憶が蘇る。膣内がネバネバの濁液で満たされる感触は、思い出すだけでも心地いい。セックスへの抵抗感が薄まっている今、素直にそう思える。

この男性よりも劣るペニスにされた膣内射精でさえも、思い出すだけで陶酔させられるのならば、こんなに精力旺盛な牡の精液を浴びたのなら、一体どうなってしまうのだろう。

勃起の下に目がいった。そこでは、陰のう――体内で製造された精液の貯蔵庫が重たそ

うに揺れている。水がタプタプの風船をほうふつとさせる。今まで相手をした男子達の物には、これほど迫力があっただろうか。

（きっと、一やあの子達よりもたっぷり出してくれて……精液はもっと熱くて、ネバネバでドロドロしてるのよ……それが私の子宮口に勢いよく当たって……膣内を満たして……私の身体の中に染み込んで……）

出されたい。

ダマじみた精液の塊を子宮口にたっぷりぶつけられたい。

肉ヒダの一枚一枚を覆って欲しい。

肉体関係を結んだだけの異性との子供を授かってしまうかも知れないが、それでも構わない。やせ我慢などしていられない。

この機会を逃したら、もう二度と、こんな男性――立派な陰のうと雄々しいペニスの持ち主に膣内射精をしてもらえるチャンスはないかも知れない。みすみす好機を逃したら、後で悶々とするかも知れない。そんなのは馬鹿げている。

学園内やこの部屋での性交により、処女だった女子の牝意識は急速に開花させられていた。それが鎌首をもたげている。

「わ……私はっ！」

だが口に出るのは。

「そんなのなんとも思わないっ、出されたいなんて少しも思ってない！　妊娠しちゃう可能性があるのに、膣内射精されたいなんて思う筈ないっ！」

正反対の言葉。酷く挑発的な喋り方だが。

「そうかも知れないね。けど、何事もやってみなければわからないからねぇ。『確認』させてもらってもいいかい？」

目と口でニンマリ笑い、問いかける。

「お、お好きにどうぞっ……でも、きっと私はなんとも思わないんだから……」

視線を横に逸らしてぼそっと返す。

直後、男性の雰囲気が変わった。太ももの付け根付近をガッシリ抱え込み、歯を食いしばって腰を振る。その激しさは、童貞喪失で我を忘れていた体育会系男子達を遥かに凌駕する。

「はぅあっ、身体に響くっ、はっ、でも、気持ちよくなんて、ンンッ、そんなに子宮口を突かないでぇ、あっ、あぁッ！」

身体の感覚がどんどん怪しくなり、自分の存在感が希薄になっていく。それでいて、子宮を揺さぶるような突き込みによる快感は鮮明に伝わってくる。

「あぁンッ、かたいっ、あふぁっ、おおきいッ、アァッ、子宮にクるぅ!!」

意識が霞んでいく中、ぼんやりする視界に他の男達が入った。皆が皆、血走った目をし

て自分の勃起を扱いている。先端は、乱れたブラウスの中で揺れる乳房を向いている。

（ペニスが……はちきれそうなペニス達が、私の胸を……おっぱいを狙って……あぁっ）

男達は「八十八センチEカップおっぱいに射精する」だとか、格好から妄想しているのか「未成年淫乱学生おっぱいにぶっかける」などと呟いている。

彼らの手の中で張り詰めている性器からは、どれほど濃い精液が出るのだろうか。彼らの陰のうもまた、貯蔵量が甚だしそうだ。既に、透明な液体が滴るほど出ている。相当な量になるのではないだろうか。

「ハァッ、ハァッ、出すぞ、虹源学園の学生に……未成年に、たっぷりナマ中出ししてやる……アフターピルがあるから思い切り出してもいいんだ……おおおぉぉぉっっっ!!!」

胸への射精に思いを馳せていた時、一足早く膣内で爆発が起こった。

ドビュルルルッ！　ドビュ、ビュッ、ビュルルルルルッ！　ビュ――――――――ッ!!!

「あひィあァッ！」

ビクビクビクビクビクゥゥゥゥッッッッッッ!!!

体験したことのない猛烈な射精を体内に浴びせられ、崩れた学生服姿の女子が激しく痙攣。ブラウスの隙間から見えるお腹は興奮で茹で上がり、ビクン！　ビクン！　と波打っている。

（こ、こんなに精液が濃いだなんて……それを注がれるのがこんなに気持ちいいだなんて

……！）

絶頂で弱りきった彼女に、男性は容赦なく精を注ぐ。亀頭の段差を膣口まで引き上げさせた後、タメを作って腰を突き出す。子宮口を突き破らん勢いでだ。

（ま、またくるっ！　まるで、セックスでメロメロにした女に、射精でとどめを刺すみたい……っ）

性感を得た亀頭はググっと膨らむ。膨らみが最高潮に近くなると、子宮口に鈴口を密着させてグリグリ抉る。その性感で再度射精。

「はぅンッ!!」

放たれる精液は極めて濃厚。強烈な青臭さは膣内に充満し、子宮口の隙間から子宮にまでも入り込む。そうして、意固地な女子学生の体内に牡との性交痕跡を刻み込む。

「んあぁぁッ！　熱いっ、熱くてネバネバの精液が私のおっぱいにっ!!」

やや遅れて他の男達が放出。狙いはやはり胸だった。

絶頂の痙攣ですっかりはだけられた胸へ、ドロドロの白濁が殺到する。一度射精しても男達は自分のものを扱き上げ、握る勃起を震えさせる。精液の粘り気は非常識で、亀頭の先から胸までが太い粘液糸で橋渡しされている。

（あぁ……こっちもすごく濃い……こんなに糸を引いてて……）

その粘り気と牡臭さは童貞精液を凌いでいた。歳を取ると生殖能力が衰えるそうだが、

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/